

阿蘇草原再生全体構想の骨子（案）

06年3月22日

はじめに

ここでは、阿蘇の草原のすばらしさと草原再生の必要性やねらいを簡潔にわかりやすく示した上で、全体構想の位置づけ、作成の趣旨を明らかにする。

- ・ 千年の草原とそれを維持してきた社会は、世界でも類を見ない。それは自然と人間との共生の産物であり、世界に誇れる遺産といっても過言ではない。
- ・ その草原が今、危機に瀕している。いま改めて持続性のある草原環境保全の仕組みづくりが求められており、「阿蘇草原再生」の試みとねらいはここにある。これには、生業として草原を利用する農業・畜産業者をはじめ、地域内外の多様な主体の参加と新たな担い手の確保・育成が必要といえる。
- ・ このように多様な人々が関わる「阿蘇草原再生」において、それぞれが活動を進めるための基本的な方向性について共通認識を持つことが重要との認識から、全体構想を作成する。

1. 阿蘇草原再生の背景と経緯

ここでは、阿蘇草原再生への取り組み及び協議会を設立した背景と経緯について、阿蘇の草原が維持されてきた歴史、それが持つ多様な価値、危機を迎えている現状とその要因などに触れながら、紹介する。

(1) 人々の生業とともに維持されてきた千年の草原

- ・ 阿蘇の草原は、有史以来、人々の生業によって成立した阿蘇ならではの自然といえる。「放牧」、「採草」、「野焼き」など人々の手が加えられることにより維持されてきた。

(2) 阿蘇の草原の価値

- ・ 農業をとおして阿蘇の人々の暮らしを支えてきた昔からの草資源や草原の役割に加え、現代においてもバイオマスとしての価値、観光資源としての価値、水源涵養、ここにしかない生きもののすみかとなっているなど、多様な価値を有している。

(3) 危機に瀕している阿蘇の草原

- ・ 人手によって維持されてきたことが、草原環境が豊かな動植物の様相（生物多様性）をもたらしてきたが、野草地は減り続け、放牧・採草・野焼きなどの利用・管理も同時に減少し、最近では消えていく動植物が急速に増えている。放棄され荒廃が目立つも草原も増え、雄大な草原景観が損なわれている。
- ・ 利用・管理の低下や人手不足の背景に、畜産業の低迷、農業形態や生活様式の変化、地域からの人口流出・高齢化の進行等の社会・経済的要因がある。

- ・ 草原を管理してきた地域の人々がみな利用者でなくなったことにより、草原から離れる人が増えるなど、様々な問題が発生している。

(4) 草原環境保全をめぐる地域内外の取り組み

- ・ 農業の多面的機能確保のための助成、野焼き・輪地切り支援ボランティア活動、草原環境学習やエコツーリズムの推進、草資源流通の事業化、トラスト手法による「花野」の再生・保全など、様々な団体、機関が草原環境の保全の取り組みを開始している。

(5) 草原再生協議会の設立

- ・ 持続性のある草原環境保全の仕組みづくりに向けて、多くの主体が共通の認識を持ち長期にわたり連携していくことが必要であることから、平成17年12月2日、自然再生推進法に基づく「阿蘇草原再生協議会」が設立された。

2. 阿蘇草原再生の対象

ここでは、阿蘇草原再生の基本的な考え方として、人工草地とのバランスに配慮しつつ野草地の保全・再生及び維持管理に重点を置くこと、及び草原再生の活動の対象とする区域の地理的な範囲を「阿蘇市・郡内の草原及びその周辺」とすることを示す。

(1) 対象に関する基本的な考え方

- ・ 阿蘇の草原には野草地のほか、牧草が播種された人工草地があるが、阿蘇本来の豊かな草原の生態系が存在するのは、野草地である。このため、野草地の保全・再生及び維持管理が重要。
- ・ ただし野草地を維持するためには、人工草地を必要とする場合もある。牧野全体の活性化のため、バランスに配慮しつつ、野草地の保全・再生及び維持管理を進める必要がある。

(2) 対象区域の範囲

- ・ 草原再生の活動の対象とする区域（「阿蘇草原地域」）は、熊本県阿蘇市及び阿蘇郡（南小国町、小国町、産山村、高森町、西原村及び南阿蘇村）内の草原（過去に草原であった場所を含む。）及びその周辺とする。

3. 阿蘇草原再生の目標

ここでは、阿蘇に住む人々が合意でき、多くの人々が取り組みに参加したくなるようなイメージと大目標を示す。いくつかの視点から、取り組みの進捗や達成度を評価する目安ともできるような、具体性をもった複数の個別目標を示す。(ただし、目標の記載方法については、作業部会でも様々な意見があり、さらに議論を重ねる必要がある。)

<大目標(例)>

- ・ 阿蘇の自然と人々のいとなみにはぐくまれてきた貴重な草原環境を子どもたちの世代に引き継ぐ(参考 - 環境省推進計画より)
- ・ 千年続いてきた草原利用の原型が見られた、昭和 30 年代のような質の高い草原と人の暮らしとの循環のシステムを、現代に合わせたかたちで再現する。

<個別目標(例)>

- ・ 草を利用した循環型農業の付加価値化による経済の創出
- ・ 草原特有の動植物の生息・生育空間である多様な草原環境の回復
- ・ 草原を維持管理する担い手の確保と新たな担い手づくり
- ・ 農業、観光などと自然の豊かさをリンクさせる仕組みづくり
- ・ 草原の素晴らしさに気づかせ、草原に関わる仕事を大事に思う意識の育成
- ・ 荒廃の進んだ草原のうち ヘクタールを再生
- ・ 協議会メンバーの関与により ヘクタールの草原を保全

4. 阿蘇草原再生の取り組み

ここでは、目標達成のためにどんな取り組みを行うか、その事業や活動の内容について、牧野利用・管理、生物多様性の保全、草原環境学習、野草資源の活用という4つの柱に沿って記述する。これら4項目は各小委員会で掘り下げるべきテーマに対応しており、具体的な内容は小委員会の議論に委ねるが、相互の関係を含め、各項目について基本的な方向性を示す。

(1) 農業・畜産業を中心とした牧野利用と多様な形で牧野を維持管理する仕組みづくり

- ・ 放牧、採草、野焼きなどによりこの阿蘇地域にしかない資源である多量の草を様々な活用した、産業としての継続を目指す。
- ・ これに加え、地域の人々の参加、都市住民の参加、ボランティアによる支援などを含めて、持続性のある草原環境の維持管理の仕組みづくりを進める。
- ・ 集落ごとでの維持管理の姿をモデルとして示すことも考えられる。

(2) 多様性に富んだ草原環境の保全・再生と維持管理

- ・ 様々なタイプの草原環境を保全することにより、生きもの(動植物のため)の豊か

な生息・生育環境、つまりは生物多様性を保全する。

- ・ 様々な形で人手を加え続けること、すなわち維持管理の継続が前提になる。このため、草原利用・管理に関わる人々に野草地環境の価値に気づいてもらうことが重要。

(3) 阿蘇の草原について理解し、愛着を持つ人々の拡大

- ・ 子供たちや地域内の人々には草原に関わる仕事の大切さや誇りを伝え、将来、草原保全にかかわる後継者が増えるようにする。
- ・ 地域外の人々には草原の自然の価値と、それを保全することの大切さを伝え、主体的に草原保全・再生の活動に参加する人数が増えるようにする。「楽しむ観光」から「護り楽しむ観光」へシフトさせ、観光客が保全・再生活動に参加することにより草原に愛着を持ってもらう。
- ・ 多様な関係者が連携し、草原環境学習のための場を多く設けることによって、草原保全と再生のための仕組みづくりを進める。

(4) 野草資源を活かした持続可能な仕組みづくり

- ・ 資源としての野草利用が進まなければ、草原の維持管理はむずかしいが、阿蘇には循環型の野草利用の技術やシステムの記憶が残されている。
- ・ 循環型の草地利用という阿蘇ならではの社会的な仕組みを現代的なシステムとして再生させ、農業・畜産業者だけでなく、幅広い産業関係者や一般消費者を含む多様な主体の参加を求めていく。
- ・ その前提として、野草地を対象とした多様な付加価値を高め、広く情報発信していく。

5. 取り組みの進め方

ここでは、様々な草原再生の取り組みを進めるに当たって、共通して踏まえるべき基本的な考え方や視点を、以下の6項目に整理して示す。

(1) 昔の知恵と技に学ぶ

- ・ 千年続いてきた草原は、阿蘇という地域固有の自然とともに生きてきた人々の営みによって育まれてきた。そこには数多くの知恵や技が蓄積されている。
- ・ 千年継続されてきた昔のシステムと知恵を学び、現代の状況に合わせるかたちで野草地の保全システムを再構築する。

(2) 地域ごとの特性に合わせた取り組み

- ・ 地域によって現状や条件に違いがあるため、取り組みを進めるにあたっては一律に考えるのではなく、地域の実情に合った形での保全・再生の手法と方向性を考える。
- ・ 集落ごとに草原利用の仕方も課題も違うことから、地域を決めてモデル的に利用・管理のあり方を検討しながら、取り組みを進めることも考える。

(3) 様々な主体との連携・協働

- ・ 農業・畜産業だけで草原を維持管理することはむずかしくなっている。草原の価値を正確に認識する地域内外の多様な主体が担い手となり、その連携によって草原再生を進める。
- ・ 草の循環利用をはじめ社会経済的な仕組みを再構築していくには、幅広い分野の人々の関与が不可欠といえる。その意味でも様々な主体による連携・協働を進める。

(4) 科学的知見の活用や実証的な手法による進め方

- ・ 科学的分析を踏まえ、保全・再生すべき草原のタイプや具体的場所の優先順位などを考えて取り組む。
- ・ 実証的手法によりできることからまずやってみて、より有効な方法を見出していく。

(5) 経済的基盤の確立など継続的な活動の推進

- ・ 地元における継続的な草原の維持管理に向けて、農家だけでなく多くの人々が関与する社会的、経済的な仕組みづくりを視野に入れて取り組む。
- ・ 担い手の収入の確保、つまりは生業として農業や観光業などが成立しなければ継続できない。農業畜産業に限らず、現代版のやり方により草原を利活用して経済的基盤ができることが重要。

(6) 情報の公開、発信と共有

- ・ 地域内外の多くの関係する人々、さらには全国に向けて、取り組み内容や考え方について幅広く情報を発信し、共有化を促進する。ただし、希少種情報については情報を公開する際に、具体的に存在する場所や動植物の品種等の取り扱いを慎重にする必要がある。
- ・ 阿蘇草原再生協議会を中心に情報を共有し、個々の取り組みの総合化を図る。

6. 阿蘇草原再生協議会委員と役割分担

ここでは、協議会に参加している委員の名簿をあげ、草原再生を進める上での役割分担を示す。